

第5章 総括

第1節 松原古墳群の形成過程

1 古墳出土土器の時期(第96図)

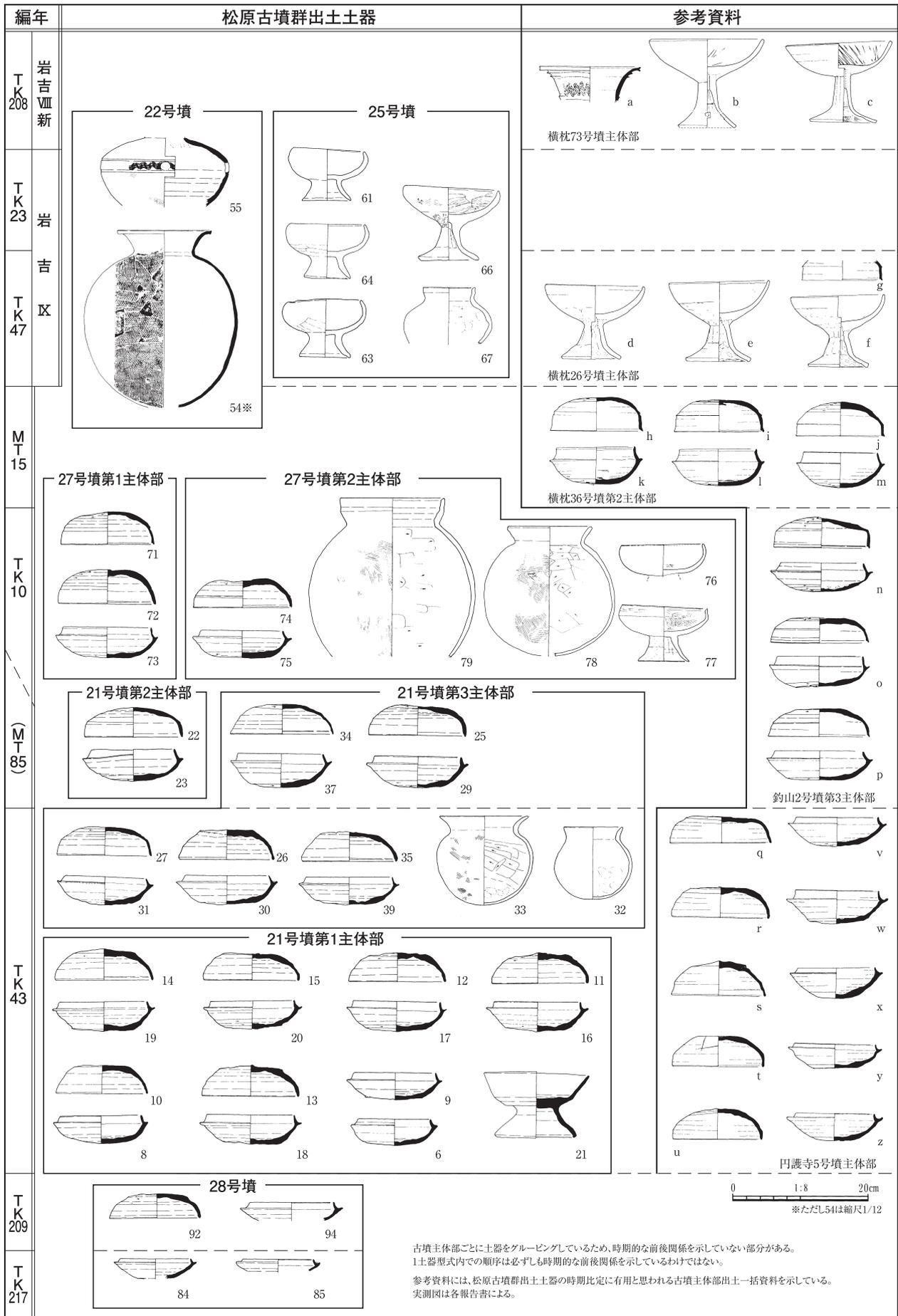
今回の調査で確認した10基の古墳は、一つの狭小な支尾根上に、古墳時代後期全般を通じて継続的に築かれており、時間的・空間的にひとつのまとまりをもっている。したがって、これらは有機的な関係にある古墳群あるいは古墳群の1支群として捉えられる。そのため、まずは各古墳の築造時期を明らかにして、松原古墳群(今回調査部分。以下、特に断らない限り松原1～31号墳全体は指さない。)の形成過程を跡付けておく必要がある(註1)。そこで、古墳主体部から出土した土器をある程度の一括性があるものと考えて、古墳ごとあるいは主体部ごとに新旧関係を示した(第96図)。

最も古いものは、25号墳主体部出土土器で、須恵器を含まず全て土師器で構成されている。高坏66は形態や磨き調整のあり方から見て、岩吉Ⅸ期のやや古い段階ものと考えられる(参考資料b・d～f)。脚付碗は類例が少ない器種のため位置づけが難しいが、東伯耆で田辺編年TK47型式並行に位置付けられている類似した形態のものがあるほか(小口ほか2003)、出雲でもTK23～TK47型式並行期に位置づけられる類例がみられるので(大谷2003)、高坏と同時期と見てよいだろう。このように、25号墳は後期前葉に位置づけられ、なかでも古い段階の可能性が考えられる。

22号墳からは、一括資料ではないが、それに準じる形で須恵器が3個体分出土した。大型L55はやや肩が張る形態、沈線間波状文の施文、タタキ調整といった特徴から田辺編年TK23型式のものと考えられ、甕54は外面の平行タタキや内面のナデの調整、口縁の形態などからみてTK47型式期のものと考えている。したがって、先の25号墳とほぼ同時期か、若干後出するものと考えられる。

27号墳第1主体部・第2主体部から出土した須恵器蓋坏は、蓋の肩部に沈線で稜を表現する点や、蓋の口縁端部に沈線で段を形成する点、身の口縁端部に段が見られない点などから、いずれもTK10型式並行に位置づけられると考えている。細かく見れば第1主体部出土の蓋坏が第2主体部のものよりやや古相を示すものの、層位的には反対に第2主体部が第1主体部に先行する。このことから、両主体部の構築は副葬品に型式差が全く反映されない程の短い期間で行われたと考えてよいだろう。

21号墳の第1～第3主体部から出土した蓋坏は陶邑編年のTK10型式新段階(MT85窯段階)とTK43型式の2型式に渡っている。前者と判断した蓋坏は、蓋肩部に沈線が施される、または蓋口縁内面に沈線や強いナデで弱い段を表現するといった特徴をもつもので、第3主体部と第2主体部で出土している。後者と判断した蓋坏は、こうした細部の表現がほとんど行われなほか、前者では中心まで行われていた蓋天井部・身底部の回転ケズリが省略化されて外周ケズリまたはナデとなっているもので、第3主体部と第1主体部で出土している。主体部の構築順序は、重複関係から第4主体部(副葬品なし)→第3主体部→第2主体部・第1主体部となることが分かっている。遺物出土主体部のうち最も古い第3主体部の構築時期が最新型式からTK43型式並行期(以降)となるため、これに後出する第2主体部や第1主体部も同じくTK43型式並行期(以降)の構築となる。このように各主体部の構築時期はすべて同じ型式期となるが、第3、第2主体部に古い型式が組成されていることや、TK43型式としたなかでも第1主体部に第3主体部よりも型式学的に新しい特徴をもつ個体が含まれていることから、構築順序の時間差が遺物にも反映されていると考えられる。したがって、21号墳の各主体部はTK43型式並行期のなかでいくらかの時間差をもちながら継続的に築かれた可能性が高い。



古墳主体部ごとに土器をグルーピングしているため、時期的な前後関係を示していない部分がある。
 1土器型式内での順序は必ずしも時期的な前後関係を示しているわけではない。
 参考資料には、松原古墳群出土土器の時期比定に有用と思われる古墳主体部出土一括資料を示している。
 実測図は各報告書による。

第96図 松原古墳群出土土器の時期

表16 松原古墳群の変遷

時代	古墳時代						
	後期前葉		後期中葉		後期後葉		終末期
須恵器 田辺編年	TK23 前葉前半	TK47 前葉後半	MT15 中葉前半	TK10 中葉後半	TK43 後葉前半	TK209 後葉後半	TK217
古墳 埋葬施設	25号墳 ←→ (24号墳→30号墳) 22号墳 ←→ (23号墳)		27号墳 ←→ 古②→新①		21号墳 ←→ 古③→新②→新①		28号墳 ←→ (29号墳)

・○数字は主体部番号を示す。「新」は新段階、「古」は古段階を示す。
 ・()内の古墳については、推定の時期を示す。

28号墳からは墳丘でTK209型式並行期、石室内でTK217型式並行期と考えられる須恵器蓋坏が出土しており、これらが28号墳の築造・利用時期を示す可能性は高いと考えている。複数型式の須恵器の存在を積極的に評価するならば、古墳の築造・初葬の時期がTK209型式期、追葬などの利用が継続した時期がTK217型式期とも考えられるが、遺物の量が極めて少ない上、出土状況も悪いため、時期を限定して捉えるのは難しいだろう。

このように、古墳出土の土器は型的にはほぼ連続していることが分かる。つまり、遺物の出土した古墳に限っても、本古墳群が継続的に築かれている様相が確認できる。

2 古墳の築造順序

出土土器によって推定された各古墳の築造時期と、土器の出土していないものも古墳の重複関係から築造時期を推定して、古墳群の築造順序を改めて表に整理した(表16)。

24号墳、25号墳、30号墳は密接して群をなしており、墳丘の規模や築造方法に共通性が高いことから、連続的に築かれた可能性が高い。立地する地形からみて、25号墳の後に24号墳が築造され、その後、24号墳を切る形で30号墳が築造されたものと考えられる。また、22号墳と23号墳も密接しており、時期的にも近いものと考えられる。23号墳は重複関係から22号墳に先行するため、後期前葉以前のものと考えられる。こうしたことから、22・23号墳と24・25・30号墳は後期前葉ごろに近接して築造されており、2つの小群が同時に並列して築造された可能性が高い。

後期中葉前半の古墳は確認できていないが、調査地外にこの時期の古墳が存在する可能性もある。その後、後期中葉後半に27号墳が、後期後葉前半に21号墳が築造される。いずれの古墳とも追葬が行われており、同時期(具体的に言えば同世代)のうちに連続的に利用されたことが分かる。後期後葉後半に横穴式石室をもつ28号墳が築造され、おそらく終末期まで追葬が継続したと考えられる。

第2節 古墳構築方法の変遷

松原古墳群の調査では、墳丘や埋葬施設の構築方法が異なる古墳がいくつか確認された。それらは、前節で明らかにしたように、時間的な前後関係をもって築かれていることから、古墳構築方法の変遷を追跡することが可能である。そこで、まず松原古墳群における古墳構築方法を類型化し、その変遷について整理する。また、鳥取平野周辺の後期古墳群に見られる古墳構築方法を概観し、松原古墳群のあり方との比較を行いたい。

1 松原古墳群における古墳構築方法の変遷

(1) 墳丘の構築方法

松原古墳群で確認された墳丘構築方法は4つに分類できる。墳丘構築過程の詳細は古墳ごとに報告で述べているので、ここでは概略をまとめて示しておく。

24・25・30号墳(古墳時代後期前葉前半～)

古墳群のなかでも比較的傾斜の急な尾根部につくられた円墳で、先述のように、25号墳→24号墳→30号墳の順に相次いで築かれた可能性がある。

墳丘構築過程は次のようになる。①：墳丘範囲を確定し、斜面高位に馬蹄形の周溝を掘削し、地山削り出しを行う。②：小規模な盛土を行う。③：盛土上から墓壙を掘り込む。

いずれも墳丘規模が数mで、盛土の低い小円墳である。ただし、尾根部の急斜面に築かれていることから、尾根下方から仰視すればある程度立体的に見える。

22・23号墳(～古墳時代後期前葉後半)

丘陵尾根部の平坦な鞍部に構築された円墳である。22号墳は25号墳より須恵器1型式程度後出と想定しているが、表16で示したように22・23号墳と24・25・30号墳のグループは築造時期が並行している可能性が考えられる。

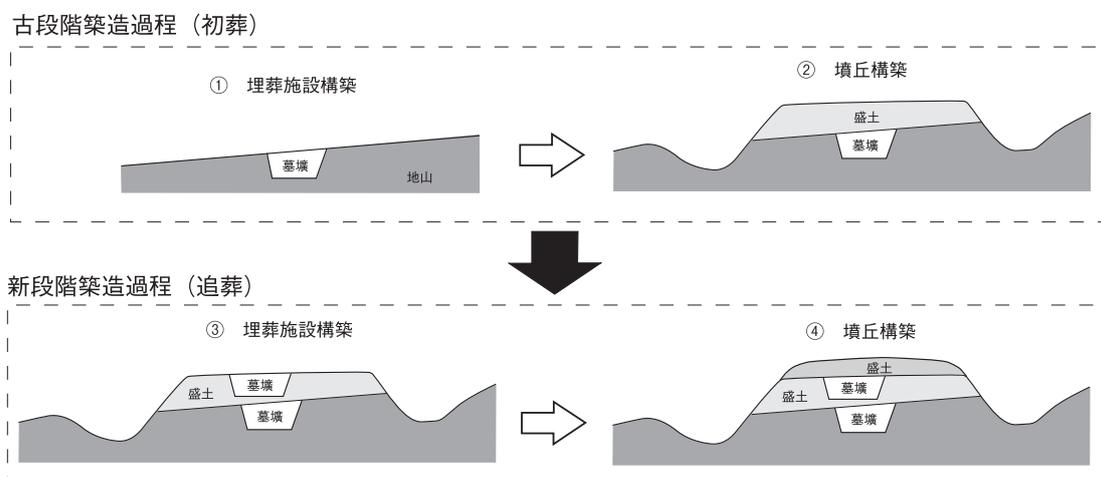
墳丘構築過程は次のようになる。①：墳丘範囲を確定し、浅い周溝の掘削と地山削り出しを行う。②：大規模な盛土を行う。③：盛土上から墓壙を掘り込む。

墳丘構築に占める盛土と地山掘削との割合は、盛土の方が多い。墳丘の高さが2m程度と24・25号墳などに比して高く、立体的である。なお、22・23号と24・25・30号とは、墳丘規模に格差があり、その構築法も費やされた労力からみればかなりの差があったと考えられる。ほぼ同時に築かれていることから、葬地とする場所や墳丘規模、墳丘築造法が使い分けられていた可能性がある。

21・27号墳(古墳時代後期中葉後半～後期後葉前半)

21号墳は丘陵尾根部の先端に、27号墳は尾根鞍部東側にそれぞれ構築されている。いずれも、複数回の埋葬が行われていて、墳丘の増築を伴う「追葬」が行われたと解釈した。21・27号墳ともに須恵器1型式ほどの期間内で、初葬から最終埋葬までが行われている。27号墳は後期中葉後半のうちに初葬と追葬が行われ、21号墳は後期後葉のうちにすべての埋葬が行われたと考えられる。

墳丘構築過程は次のようになる。①：墓壙を旧表土上から掘り込み、埋葬を行う。②：大規模な盛



第97図 松原21・27号墳の築造過程模式図

土を主体として墳丘を構築する。以上で、古段階の古墳築造が終了する。追葬は、以下のように、初葬と同じ過程を繰り返している。③：古段階墳丘上に墓壙を掘り込み、埋葬を行う。④：大規模な盛土を主体として墳丘を構築する(第97図)。

いずれも墳丘規模は調査地内では最大級である。斜面地に近い位置に立地する27号墳は墳丘構築に占める周溝掘削の割合がやや高いが、両者とも墳丘構築の主体となるのは盛土である。

28号墳(古墳時代後期後葉後半)

横穴式石室を主体部とする円墳である。尾根鞍部に22・23号墳がつくられているため、非常に幅狭な斜面地に墳丘を構築している。

墳丘および横穴式石室構築順序は次のようになる。①：墳丘範囲を確定し、周溝掘削と地山削平を行う。②：石室墓壙を地山に大きく掘り込む。③：墓壙内に石室石材を設置しながら、裏込めと墳丘盛土を行う。④：封土を施し、墳頂部を形成する。

28号墳は調査地内で最も新しい段階の築造である。これ以前に築かれた古墳との大きな違いは、横穴系の埋葬施設が採用されていることで、これによって、古墳築造の方法や過程が大きく変化している。ただし、古墳の立地や墳丘規模、周溝の形態や掘削方法などは、以前に築かれた古墳と大きな差はなく、古墳群としての連続性が強く窺える要素ももっている。

(2)埋葬施設の構築方法

墳丘構築過程で見たように、松原古墳群の埋葬施設の構築にはいくつかのバリエーションが認められる。これを和田晴吾氏による分類(和田1989)によって整理すると以下ようになる(第98図)。

縦穴系埋葬施設

掘込墓壙 a 類：墳丘構築後に墓壙を掘り埋葬施設を構築する。22・23・24・25号墳が相当する。

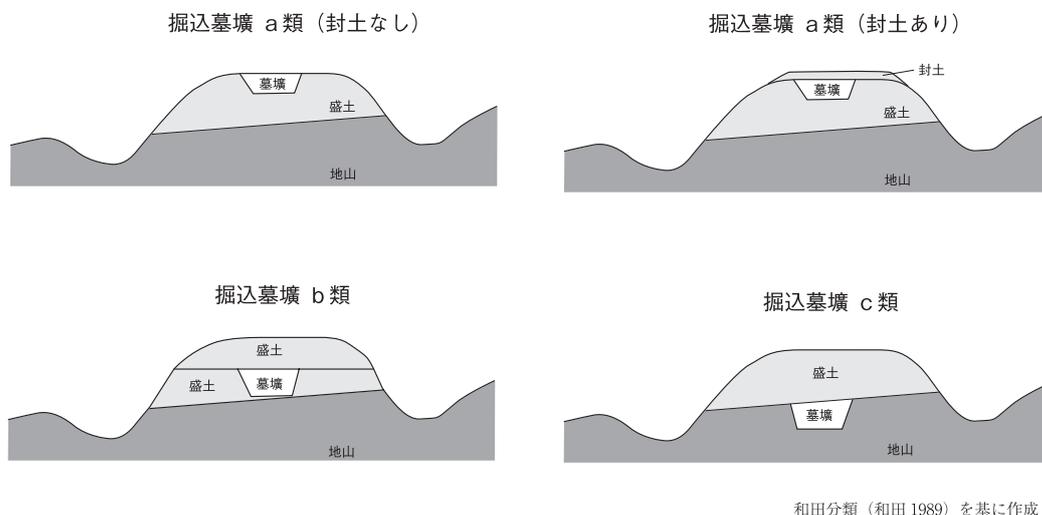
掘込墓壙 b 類：墳丘構築途中で墓壙を掘り埋葬施設を構築する。本古墳群では確認されていない。

掘込墓壙 c 類：墳丘構築前に墓壙を掘り埋葬施設を構築する。21・27号墳が相当する。

横穴系埋葬施設

掘込墓壙 c 類：墳丘構築前に墓壙を掘り、石室構築と墳丘構築を併せて行う。28号墳が相当する。

以上のように、松原古墳群では墓壙構築に3つのパターンが存在することを確認できる。なかでも、本古墳群で特異なあり方を見せる21号墳・27号墳の構築法は、掘込墓壙 c 類を2回繰り返した結果だ



和田分類(和田1989)を基に作成

第98図 墳丘・埋葬施設構築方法の類型

と捉えられるだろう。

各類型に該当する古墳はそれぞれ築造時期が近接している。掘込墓壙 a 類に該当する22・23・24・25号墳はいずれも後期前葉に築造された可能性が高く、掘込墓壙 c 類の21・27号墳は後期中葉後半から後期後葉前半にかけての築造、横穴系の掘込墓壙 c 類の28号墳は後期後葉後半の築造である。したがって、松原古墳群における埋葬施設構築方法は掘込墓壙 a 類から掘込墓壙 c 類へと変遷していったこととなる。

一方、墳丘の構築方法についても、4つの構築法が時期的に変遷していることを確認した。そこで、墳丘構築と埋葬施設構築法との関係をまとめると以下のようになる。

第1段階 後期前葉：墳丘は低く地山整形より盛土の割合が低い。掘込墓壙 a 類。

墳丘は高く地山整形より盛土の割合が高い。掘込墓壙 a 類。

第2段階 後期中葉後半～後葉前半：墳丘は高く地山整形より盛土の割合が高い。掘込墓壙 c 類。

第3段階 後期後葉後半：墳丘構築は地山整形より盛土の割合が高い。掘込墓壙 c 類。

第1・2段階では、竪穴系の埋葬施設が用いられている。第1段階では墳丘構築完了後に埋葬施設が構築されるのに対し、第2段階になると墓壙構築後に墳丘構築を行っている。この変化は、古墳構築に関する技術上の変化を示しているだけでなく、当然、葬送過程自体の変化も表していると考えられることから、画期をなすものと評価できよう。また、第2段階の古墳が、いずれも墳丘増築を伴う追葬を行っているという点からも、埋葬施設・墳丘構築方法の変化の背景に、文化的・社会的な変化があることが窺われよう。

第3段階には、横穴式石室の導入により埋葬施設と墳丘の構築法が大きく変化しており、この段階の開始期も大きな画期として評価できる。横穴式石室の導入によって、古墳築造技術や葬送儀礼のあり方は大きく変化したと考えられるため、前段階以上の変化をもたらした画期と言えよう。

2 周辺地域の後期古墳における古墳構築方法の変遷

(1) 周辺古墳群における墳丘・埋葬施設構築方法の変遷

松原古墳群では古墳構築方法に変遷が認められたが、周辺の後期古墳群ではどのようなあり方を示しているのだろうか。鳥取平野周辺に展開する古墳群のうち後期古墳を含む、布勢墳墓群((財)鳥取市教育福祉振興会1998)、釣山古墳群(鳥取市遺跡調査団1992)、服部墳墓群((財)鳥取市文化財団2001)、下味野古墳群((財)鳥取市文化財団2002)、倭文古墳群((財)鳥取市文化財団2004)、横枕古墳群((財)鳥取市文化財団2002・2003・2007)、円護寺古墳群((財)鳥取県教育文化財団1983、(財)鳥取市文化財団2002)、面影山古墳群((財)鳥取市教育福祉振興会1996)、六部山古墳群(鳥取市教育委員会1994、(財)鳥取市教育福祉振興会1994・1995)の古墳築造方法を概観してみよう(表17)。

墳丘の構築方法はすべての古墳群で共通性が見られ、大半が丘陵高所側を中心とした周溝掘削と、大きな単位の盛土によって墳丘が構築されている。ただし、盛土の高さは一定ではなく、松原24・25号のような低墳丘のものから、松原22・23号墳よりもさらに高く盛土をするものまで漸移的な変化がある。しかし、松原古墳群のように低い墳丘をもつ古墳と高い墳丘をもつ古墳を明確に分離できる古墳群はないようで、質的な差というよりも単なる量的な差であった可能性が高い。盛土の方法も共通性が高く、一部の例外を除いてほぼすべてが大きな単位で水平に土を積み上げて行っている。また、墳丘構築方法が時期的に変化する例も見られず、墳丘構築は固定的、「伝統的」方法が維持されていた

表17 周辺古墳群の墳丘・埋葬施設構築方法

地域	古墳名	墓壇類型※	墳形・規模 (最大長×高さ)単位m	主体部数(棺形態)	時期	備考
湖山池周辺	松原25号墳	a	円(7.5×1.3)	1基(木棺)	後期前葉	
	松原23号墳	a	円(12.5×1.3)	1基	後期前葉	
	松原22号墳	a	円(10.5×1.8)	1基	TK47	
	松原24号墳	a	円(6.5×1.3)	1基	後期前葉?	
	松原27号墳	c+c	方(14×1.4)	2基(木棺1・直葬1)	TK10	墳丘増築を伴う追葬
	松原21号墳	c+c	方(16×2.0)	4基	TK43	墳丘増築を伴う追葬
	松原28号墳	c	円(13×3.0)	横穴式石室1	TK209	
布勢5号墳	c+c?	方(10×2.5)	2基(木棺ほか)	TK43	墳丘増築を伴う追葬か。	
鳥取平野南部 (千代川左岸)	釣山2号墳	a+a	前方後円 (26.4×4.3)	3基(木棺) 古段階 第3主体 第1主体 新段階 第2主体	TK10古 TK10新 TK43	墳丘増築を伴わない追葬(第1)と増築を伴う追葬(第2)。各主体部出土土器に時期差あり。第3と第1は切り合い関係あり。
	服部34号墳	a?	円(8.6×0.9)	1基?	TK47	
	服部36号墳	a(+c)	円(10.4×2.5)	中心1基(木棺) 周辺1基(箱式石棺)	TK43	周辺埋葬に墳丘増築
	下味野43号墳	a	円(11.4×1.1)	1基(箱式石棺)	中期	
	下味野40号墳	a	円(15.5×4.1)	1基(直葬)	中期	
	下味野42号墳	a	円(9.1×0.8)	1基(直葬)	中期後葉	
	下味野44号墳	a	円(11.8×10.9)	1基(木棺)	TK47?	
	倭文6号墳	a+封土	円(13×5.2)	1基(木棺)	TK47	
	倭文7号墳	a	円(12×4.6)	1基	TK47	
	横枕62号墳	a	円(10×2.6)	1基(木棺)	中期後葉	
	横枕73号墳	a	円(15.0×1.5)	2基(木棺)	TK208	
	横枕87号墳	a	円(9.0×1.5)	1基	後期前葉	
	横枕40号墳	a	円(13.9×2.4)	1基(直葬)	TK23	
	横枕38号墳	a	円(18.5×4.6)	1基(木棺)	TK47	周辺埋葬(箱式石棺)あり
	横枕26号墳	a	円(9.6×2.1)	1基(直葬)	TK47	
	横枕59号墳	a	円(17.1×6.0)	2基(木棺)	TK47	
	横枕60号墳	a	円(12.7×2.9)	1基	TK47	
	横枕42号墳	a?	円(14×2.1)	削平or流失?	TK47	
	横枕55号墳	a?	前方後円(23.2×2.8)	削平or流失?	後期中葉?	
	横枕57号墳	a?	円(10.9×1.2)	削平or流失?	後期中葉	
	横枕83号墳	a	円(11.0×2.1)	1基	後期中葉	
	横枕39号墳	a	円(9.5×2.3)	1基(木棺)	後期中葉	
	横枕53号墳	a	円(11.5×2.3)	1基(直葬)	MT15	
	横枕36号墳	a	円(13.6×1.7)	2基(木棺)	MT15	
	横枕82号墳	a	円(10.6×2.7)	1基	MT15	
	横枕11号墳	a	円(10.3×3.4)	1基(木棺)	TK10	
横枕85号墳	a	円(9.0×0.9)	1基	TK10		
横枕43号墳	c	円(16.8×2.10)	1基(木棺)	TK10	斜面低位に若干の盛土をしてから墓壇掘削	
横枕80号墳	c	円(11.0×2.3)	2基(木棺)	TK10	主体部切り合いあり	
横枕44号墳	無墓壇	円(14.8×3.1)	横穴式石室1ほか	TK43	石材設置溝のみ掘削	
横枕81号墳	c	円(11.0×2.2)	1基	後期	斜面低位に若干の盛土をしてから墓壇掘削	
鳥取平野南部 (千代川右岸)	面影山36号墳	a	円(12.2×0.8)	1基(木棺)	中期後葉	
	面影山83号墳	a	円(16.4×0.5)	2基(木棺・直葬)	MT15	
	六部山48号墳	a	円(10.5×1.6)	2基(箱式石棺・不明)	中期	
	六部山33号墳	a	円(12.0×1.8)	1基(箱式石棺)	中期	
	六部山32号墳	a	円(11.0×1.1)	2基(箱式石棺)	中期中葉	
	六部山81号墳	a	円(19.0×3.6)	2基(箱式石棺)	後期?	
	六部山5号墳	a	円(16.0×2.6)	1基(木棺?)	TK47	
	六部山28号墳	a	円(12.0×1.1)	2基(箱式石棺)	TK47	
	六部山26号墳	a	円(12.8×2.2)	1基(箱式石棺)	MT15	
	六部山27号墳	a	円(15.0×3.1)	1基(箱式石棺)	MT15	
六部山80号墳	c	円(13.0×2.9)	横穴式石室	TK43		
鳥取平野北部	円護寺42号墳	b	円(9.7×1.8)	1基(直葬)	MT15	
	円護寺8号墳	b	円(11.5×3.2)	2基(直葬)	MT15	
	円護寺40号墳	b	円(6.5×0.8)	1基(直葬)	TK10	
	円護寺6号墳	a	円(7.3×1.8)	1基(箱式石棺)	TK10	
	円護寺7号墳	a	円(13.6×3.0)	1基(木棺)	TK10	
	円護寺41号墳	a	円(8.3×1.8)	1基(箱式石棺)	後期中葉?	
	円護寺27号墳	b	円(14.0×1.4)	横穴式石室	MT15~TK10	長期の追葬あり。初葬時期不確定
	円護寺21号墳	b	円(7.0×2.4)	1基(箱式石棺)	TK43	
円護寺5号墳	無墓壇	円(11.4×3.2)	1基(箱式石棺)	TK43	棺材設置溝のみ掘削	

※墓壇類型の小文字アルファベットは「掘込墓壇○類」の略。掘込墓壇a類のうち、封土をもつことが明らかなもののみ「a+封土」としている。「無墓壇」は墓壇を設けずに、棺材や石室石材の設置と墳丘盛土を並行して行うもの(和田1989)。

といえる。このように、墳丘の構築方法からは、古墳群間での共通性の高さ、不変性が特徴として挙げられよう。

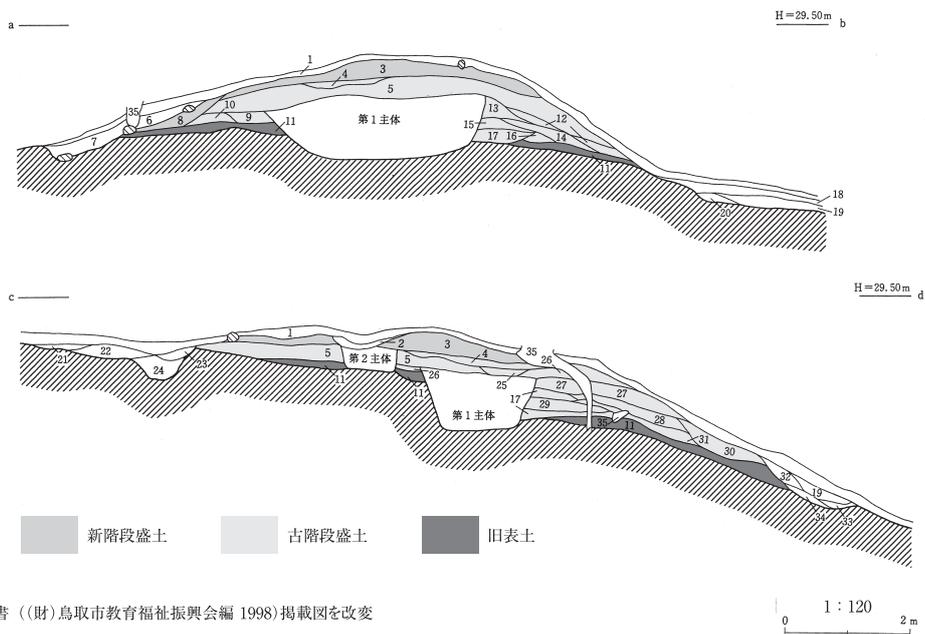
埋葬施設構築方法も各古墳群で共通性が高い。時期的には変遷をみせているものの、その変遷のあり方は各古墳群がほぼ共通している。後期前葉から後期中葉前半ごろまでは各古墳群とも掘込墓壇 a 類が主体で、後期中葉後半以降掘込墓壇 c 類が加わり、後期後葉には竪穴系では掘込墓壇 c 類が主体となっている(註2)。この流れは、松原古墳群の墳丘・埋葬施設構築方法において確認された、第1段階から第2段階への変遷と共通している。掘込墓壇 a 類は下味野古墳群や横枕古墳群、六部山古墳群などで確認できるように、中期から継続する「伝統的」な構築方法と考えられるので、後期中葉後半期に新たに掘込墓壇 c 類が導入されたと考えられる。

また、後期中葉に導入される横穴式石室の構築方法も掘込墓壇 c 類か、それと同じく墳丘構築が後出する無墓壇タイプを採っている。このことから、後期中葉以降は竪穴系と横穴系で共通した墓壇構築方法が採られていたとも考えられる。もちろん、両者は埋葬施設・墳丘構築の原理が大きく異なっているだけでなく、葬送儀礼の過程なども全く異なっていると思われるので、墓壇構築の類型の共通性が本質的な類似を示しているわけではない。しかし、竪穴系埋葬施設に掘込墓壇 c 類が出現する時期が、横穴式石室の導入期とほぼ同時期という時間的な関係を積極的に評価すれば、両者に直接または間接的な関連性があったことは十分考えられる(註3)。例えば、横穴式石室をもつ古墳が掘込墓壇 a 類を採用することはまずありえないように、「伝統的」な古墳築造技術を採らない横穴式石室が普及することで、竪穴系埋葬施設の構築方法が変化したと考えることは可能だろう。

(2) 墳丘増築を伴う追葬

松原21・27号墳では、墳丘増築を伴う追葬が確認されていることから、後期中葉以降に横穴式石室が竪穴系埋葬施設をもつ古墳に影響を与えた可能性が考えられる。後期中葉後半～後期後葉に、竪穴系埋葬施設をもつ古墳で墳丘盛土を伴う追葬が行われている例は、やや不確実ながら釣山2号墳と布勢5号墳でも確認されている(第99図)。

全長26mの前方後円墳である釣山2号墳(鳥取市遺跡調査団1992)では、2つの埋葬面から3つの主



第99図 布勢5号墳墳丘土層断面

体部が検出されており、墳丘増築を伴う追葬が行われている。第3主体と第1主体が最初の墳丘面上から掘り込まれており、副葬須恵器が前者はTK10型式、後者はTK10型式新段階と時期差をもつため、後者が追葬と考えられる。初葬の墓壙類型は1次追葬と掘込面が同一であることから掘込墓壙a類である。2次追葬である第2主体は、増築後の墳丘面から掘り込まれており、TK43型式並行の須恵器を副葬する。第2主体も墓壙類型はa類であるが、墳丘増築がこの追葬に伴うのか、1次追葬である第1主体構築に伴うのか判然としない。前者の場合では、掘込墓壙a類による古墳築造が2度行われたことになり、後者の場合では、初葬が掘込墓壙a類、1次追葬がc類、2次追葬がa類となる。いずれにしても、墳丘増築を伴う追葬が行われたことに変わりはないが、墓壙類型が混合する後よりは前者の可能性が高いと考えられる。

布勢5号墳((財)鳥取市教育福祉振興会1998)では埋葬面の異なる2つの墓壙が確認されている(第99図)。報文では墳丘増築および追葬が行われたとは判断されてはいないものの、松原古墳群の例から見てその可能性は十分考えられよう。第1主体は斜面低位側に厚く、斜面高位側に非常に薄く盛土を施した後、墓壙を掘り込んでいる。盛土の有無で判断すれば掘込墓壙b類となるが、盛土の実際のあり方から判断すればc類とするほうが妥当ではないだろうか。墓壙構築後、盛土を1～2層施して古段階の墳丘を完成させたものと考えられる。第2主体はその古段階墳丘上面から掘りこまれており、墓壙構築後に盛土を1層施している。両主体部から出土した須恵器から、初葬がTK43型式並行期に行われ、型式差が現れない程度の期間内に追葬が行われたと考えられる。

釣山2号墳、布勢5号墳は松原21・27号と同時期の所産で、地域的にも千代川以西に限られることから、共通性が高いと見てよいだろう。こうした追葬行為が松原古墳群のみで行われたのではないとすれば、追葬を前提とする横穴式石室が普及することで、竪穴系の埋葬施設を有する古墳でも追葬が行われるようになった可能性も十分考えられる(註4)。

後述するように、鳥取平野周辺の古墳群では、千代川以東の地域とそれ以外の地域で、横穴式石室の導入に時期差が存在する。前者では導入期が後期中葉前半にあるのに対し、それ以外の地域では導入・普及期が後期後葉まで遅れる。こうした状況からは、横穴式石室を採用しない地域や古墳群でも、追葬行為のみは採用されたと捉えることも可能だろう。あるいは、短絡的に直接の影響と解釈するよりは、追葬を行うような社会的背景が形成された結果と見たほうがよいかもしれない。松原古墳群で21号墳築造の後に横穴式石室が採用されていることから、横穴式石室との関連性や連続性、追葬行為に共通する社会的背景の存在が推察されよう。

(3) 古墳構築方法から見た松原古墳群の特徴

このように、松原古墳群の後期古墳の築造方法は、鳥取平野周辺地域で概ね一般的なものであったと評価できる。埋葬施設構築方法とその変遷のあり方も、松原古墳群と他の古墳群でほぼ共通していることを確認した。その一方で、松原21・27号墳のような墳丘増築を伴う追葬という鳥取平野周辺において希少な墳丘・埋葬施設構築方法も見られる。しかし、他の古墳群でもわずかながらも類例を確認できたため、松原21・27号墳を単なる特殊例として捨象することはできないであろう。また、埋葬施設構築方法の変化と墳丘増築に伴う追葬の開始はいずれも後期中葉に起こっており、特に松原古墳群ではこの2つの現象が連動している。既に述べてきたように、この2つの現象と鳥取平野周辺古墳群への横穴式石室の導入・普及とは関連したものであった可能性が強い。

松原古墳群の古墳築造方法の変遷を埋葬のあり方の変遷として整理すると、竪穴系埋葬施設を1基

1回のみ設ける「単葬」の第1段階から、複数の竪穴系埋葬施設を複数次にわたって築くことで「追葬」を行う第2段階へ、さらに本来的に追葬可能な構造である横穴系埋葬施設を築くことで継続的な追葬を行う第3段階へと変遷している。しかも、第1段階には、墳丘規模と墳丘築造法の異なる古墳が並列的に築かれていたのが、墳丘増築を伴う追葬が開始され始めた第2段階になって古墳の系列が一本化されている。この変化は、第2段階の古墳が横穴式石室をもつ古墳と類似した機能をもつ「家族墓」へと変容した結果とも捉えることができる。このように、松原古墳群の埋葬施設築造方法の変遷には、横穴式石室普及の過程、あるいは「追葬」という行為の普及の過程が如実に表れていると評価することも可能だろう。この点に松原後期古墳群の重要な特徴があると言えるだろう。

第3節 鳥取平野周辺古墳群における松原古墳群の位置づけ

鳥取平野周辺の丘陵上には数多くの古墳が確認されており、そのほとんどは古墳群を形成している。今回調査をおこなった松原古墳群もそうした鳥取平野周辺に一般的な古墳群の一つと言えよう。

近年、道路建設に伴い大規模な発掘調査が行われており、徐々に鳥取平野周辺での古墳群の展開についての情報が蓄積されつつある。まだ十分な情報が得られたとは言えないものの、一旦それらの成果を整理することは松原古墳群の位置付けを考える上で重要だと思われる。

ここでは、鳥取平野周辺の丘陵に展開する古墳群を便宜的に平野北部、平野南部、湖山池周辺という3つのエリアにわけて捉え、それぞれの地域的な特徴について概観することで、松原古墳群の位置づけを行いたい。検討する時期は、松原古墳群と同時期の後期古墳群に加えて、その前史として重要と思われる中期古墳群についても対象とする。

1 古墳群の展開(表18)

鳥取平野周辺の古墳群はすべて丘陵上に形成されている。この地域の丘陵は、ほとんどが松原丘陵で見られるような、狭小な尾根と谷が複雑に入り組んだ樹枝状の地形を成している。したがって、古墳群も地形的な制約を大きく受けて、狭小な尾根ごとに群が形成される場合が多い。こうした古墳群の立地や地形に制約された群形成のあり方は、鳥取平野全域で共通している^(註5)。

古墳群の形成は、鳥取平野北部、南部、湖山池周辺のいずれの地域でも、古墳時代前期から見られる。中期の古墳群の多くは、こうした前期古墳群から継続するものである。その一方で、中期に入って新たに形成され始めた古墳群もいくらか存在する。下味野古墳群では、中期に古墳群が形成され始め、後期まで継続的に古墳が築造されている^{(財)鳥取市文化財団編2002c}。このように、中期の古墳群は前期から継続するものが多いが、中期に形成され始めて後期に継続するものも見られる。

中期の古墳群の多くは前後の時期と連続して築造されているため、複雑なあり方を示しており、群形成のパターンを把握するのが難しい。しかし、少数ながら、古墳群(支群)の展開が明確になっている事例もある。例えば、下味野古墳群は尾根を1単位とする2つの支群が形成されており、尾根の上方に展開していく支群と、尾根の下方に向かって展開する支群とが確認できる。地形的に指向する方向は逆ではあるが、同一尾根上で順次連続していくというパターンは共通する。また、横枕古墳群では、前期から中期への継続的な築造の流れが追える尾根^(No11北調査区・No12調査区)があるほか、主に中期に位置づけられる古墳のみがまとまってつくられている尾根^(No11南調査区)が存在する^{(財)鳥取市文化財団編2002c・2003・2007}。このように、尾根ごとに築造の時期的まとまりやある程度の連続性が見られるのが、鳥取平野の古墳群の一般的なあり方と考えられる。

後期の古墳群も中期と同じく、一定のまとまりをもちながら展開する。円護寺古墳群では、尾根ごとについていくつかの支群が存在しており、いずれの支群でも調査された古墳の多くが後期に位置づけられている(財)鳥取市文化財団編2002a)。複数の支群が同時期に並行して展開するあり方から見て、この古墳群は複数の造墓集団によって形成されたと考えられる。円護寺古墳群のように後期に形成され始める古墳群が一定数存在する一方で、前期あるいは中期から継続する古墳群も存在する。横枕古墳群では、後期に入ってさらに多数の古墳が築かれており、尾根ごとについていくつかの支群が形成されている。ちなみに、横枕古墳群の場合、前・中期の支群は丘陵のなかでも低い尾根上に形成されるのに対し、後期の支群は高い尾根上に形成される傾向がある。

前期から後期まで継続する古墳群の多くは、古墳の形成されない期間を挟んで、後期に再び多数の古墳が群を成して築造されている。また、前期以来古墳が連続的に築かれている横枕古墳群も、複数の継続時期の異なる支群がまとまった結果、前期から後期までの継続性が追えるのであって、必ずしも直列的な連続性をもって古墳群が形成されているわけではない。むしろ、先述のように丘陵や支尾

表18 周辺古墳群の展開

地域		湖山池周辺				主要古墳
		西部		東部		
古墳時代	前期	前葉		桂見古墳群		桂見2号墳
		中葉				
		後葉				吉岡51号墳
	中期	前葉			服部古墳群	
		中葉	吉岡古墳群	倉見古墳群		里仁29号墳 里仁33号墳
		後葉			里仁古墳群	
	後期	前葉	松原古墳群			大熊段1号墳 布勢古墳 三浦古墳
		中葉		布勢古墳群		
		後葉				吉岡1号墳 松原28号墳
	終末期					山ヶ鼻古墳

地域		鳥取平野				主要古墳	
		南部		北部			
		千代川左岸		千代川右岸			
古墳時代	前期	前葉	横枕古墳群				美和32号墳 面影山74号墳
		中葉		篠田古墳群	美和古墳群		
		後葉		倭文古墳群	広岡古墳群		篠田6号墳 六部山3号墳 古郡家1号墳
	中期	前葉			六部山古墳群		
		中葉				湯山古墳群	湯山6号墳
		後葉	下味野古墳群		面影山古墳群		
	後期	前葉					倭文6号墳
		中葉				円護寺古墳群	
		後葉					円護寺27号墳 六部山80号墳 梶山古墳
	終末期				浜坂横穴群		

※ 発掘調査などの現地調査によって時期が判明している古墳群のみを示した

根を時期的に換えながら展開するあり方からは、古墳群全体の連続性よりも各支群の個別性の方が前面に出てくるであろう。このように、鳥取平野周辺で一般的な前期から後期まで長期間継続する古墳群も、実態としては群形成に一定期間でのまとまりが存在する。なかでも、古墳の築造数が増加し、古墳群および支群の形成が最も盛んになるのは後期である。しかも、後期の古墳群および支群は間断なく連続するものが多く、群としてのまとまりが非常に高いと言えよう。このように、古墳群あるいは支群の形成のあり方において中期以前と後期以降には画期が存在しているようである。

松原古墳群でも今回調査地で、後期の古墳群あるいは支群が時間的にも空間的にも非常によくまとまって形成されたことを確認した。中期以前の群形成のあり方については今後の調査を待たなければならないが、おそらく今回調査の後期古墳群または支群ほどのまとまりは見せないと思われる(註1参照)。このように松原古墳群でも、尾根ごとに古墳群および支群が展開する点や、後期に古墳が多数築かれ、時間的・空間的にまとまりのある古墳群あるいは支群が形成される点など、鳥取平野周辺の古墳群の展開と共通するあり方が確認できるだろう。

2 古墳要素の変遷(表19)

鳥取平野周辺古墳群の古墳は、古墳時代前期以来、前段階から受け継いだ「在地的」、「伝統的」な要素と「外来的」、「先進的」な要素が混ざり合いながら変化して行く。

前期前半の古墳は、方形を基調とし、埋葬施設は大型の二段掘りの墓穴内に木棺墓がともなう。前期後半には、方形を基調とする墳形が円形へと変化することが、平野南部の広岡古墳群(鳥取市遺跡調査団1989)、横枕古墳群などの調査によって明らかとなった。墳丘という外見上の要素は、新要素の導入で大きく変化するが、埋葬施設などの変化は少なく「伝統的」な要素を強く残している。

中期には、前期の伝統を踏襲しながら、墳丘構築や埋葬施設に変化が見られる。墳丘構築は盛土を伴うものが多くなり、地山整形だけで墳丘を構築する事例はなくなる。その一方で、湖山池の東岸に位置する里仁古墳群では、前期から中期にかけて方墳が連続して築造されている((財)鳥取県教育文化財団1985)。注意しなければならないのは、中期に入ってからでも方墳を造る「伝統」を維持する地域が存在することである。また、中期には、地域ごとあるいは古墳群ごとに埋葬施設などに違いが認められるようになる。例えば、平野北部と南部では、箱式石棺と木棺(組合せ木棺)の2種類が一般的に使用されるのに対し、湖山池周辺地域では木棺使用のほうが一般的である。平野北部と南部のなかでも、千代川右岸の古墳群の方が特に箱式石棺を多用するので、千代川を挟んで東と西で大きく2つの地域性が存在するとも捉えられる。ちなみに、平野南部の広岡古墳群では、前期後半には箱式石棺が導入されており、他の古墳群に先行する形で新要素の導入が認められる。他の地域では中期に入ってから見られる要素が先行して平野南部で取り入れられていることは、当時平野南部が鳥取平野の「先進的」地域であった可能性が考えられよう。

後期に入っても、中期に見られた埋葬施設の地域性は継続しており、湖山池周辺には箱式石棺は見られない。また、松原21・27号墳などの追葬に伴って墳丘が重複する例は平野北部・南部では確認されていないので、これも湖山池周辺の埋葬方法の地域性と考えられる。こうした地域性がある一方で、墳丘などの外見的特徴は各地域とも共通性が高い。また、埋葬に関わる特徴においても、墓壙構築方法とその変遷が各地域ともほとんど違いがないように、ある程度共通する点も見られる。

後期中葉以降、横穴式石室を埋葬施設とする古墳の築造が始まる。平野北部の円護寺27号墳((財)

鳥取県教育文化財団1983)で先進的に導入され、やや遅れて平野南部では六部山80号墳(鳥取市教育委員会編1994)、湖山池周辺では葦岡長者古墳(吉岡1号墳)(明日の湖南を考える会1984)が築かれる。このように、平野各地で横穴式石室という新たな要素を導入したものの、玄室内には「箱式石棺」と思える埋葬施設が存在する。これは、他地域からの影響を大きく受けながらも、「伝統的」な要素を組み込んだ結果と捉えることもできる。

後期後葉後半には、横穴式石室を埋葬施設とする古墳が多く、古墳群で築造される。湖山池南岸域の横穴式石室は、出土遺物からすれば、吉岡1号墳(T K43型式並行)に次いで、松原28号墳(T K209型式並行)が造られたと考えられる。湖山池周辺で松原28号墳と同時期の横穴式石室をもつ古墳には、倉見9号墳((財)鳥取県教育文化財団1996)と熊田古墳(鳥取市教育委員会編1980)がある(表20、第100図)。いずれも、古墳の立地、墳丘規模、墳丘構築法、石室の基底部構造や玄室プランなどに共通性

表19 古墳要素の変遷

地域		湖山池周辺								
		南西部				南東部				
要素		墳形	墳丘構築	墓壇	埋葬施設	墳形	墳丘構築	墓壇	埋葬施設	
古墳時代	前期	前葉								
		中葉	方形	地山整形+封土	二段墓壇 (掘込墓壇 a 類)		方形	地山整形	二段墓壇 (掘込墓壇 a 類)	
		後葉	円形			木棺				木棺
	中期	前葉								
		中葉					円形			箱式石棺
		後葉		地山整形+盛土				地山整形+盛土		
	後期	前葉			掘込墓壇 a 類				掘込墓壇 a・b 類	
		中葉	円形							
		後葉	方形		掘込墓壇 c 類	横穴式石室	方形		掘込墓壇 c 類	横穴式石室
	終末期								石棺式石室	

地域		鳥取平野								
		南部				北部				
要素		墳形	墳丘構築	墓壇	埋葬施設	墳形	墳丘構築	墓壇	埋葬施設	
古墳時代	前期	前葉								
		中葉	方形	地山整形+封土	二段墓壇 (掘込墓壇 a 類)		方形	地山整形+封土		木棺
		後葉				木棺				
	中期	前葉							掘込墓壇 a 類	
		中葉	円形			箱式石棺	円形			箱式石棺
		後葉		地山整形+盛土	掘込墓壇 a 類			地山整形+盛土		
	後期	前葉							掘込墓壇 a・b 類	
		中葉			掘込墓壇 c 類					
		後葉	方形			横穴式石室				横穴式石室
	終末期								横穴	

※現在までに発掘調査で得られた情報から作成しているため、今後の調査によっては変更される可能性がある。
 ※前期古墳の大半は盛土をもたないため、墓壇類型の判別が困難である。ここでは、墳頂から墓壇が掘り込まれている点を評価して a 類に分類した。

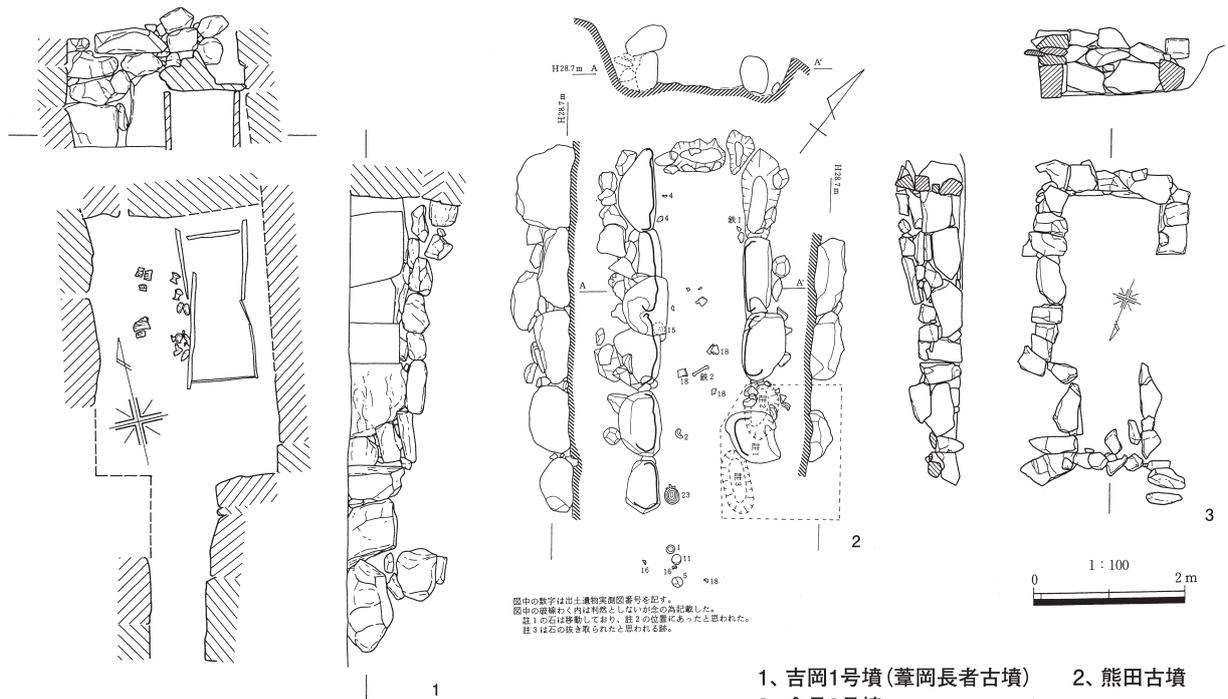
が高く、湖山池周辺地域が造墓活動において近い関係にあったことが推測される。

後期後葉から終末期にかけて、鳥取平野の千代川以東では玄室内の天井が一段高い構造の横穴式石室が存在する。これは「中高式天井」と呼ばれ、千代川以東の因幡地方の横穴式石室の地域性として捉えられている(下高1996など)。先述の湖山池周辺地域で調査が行われた横穴式石室は、すべて天井部が失われており、「中高式天井」であったかどうかは判断できない。いずれであったにしても、玄室プランが長方形であること、基底石に大型石材を使用する構造であること、地山を掘削した墓壇内に石室を構築することなど、「中高式天井」横穴式石室と共通性が存在する点には注目しておきたい。

鳥取平野周辺に展開する古墳群を、便宜的に3つのまとまりとして捉え、それを比較することによって、共通性や地域性を確認することができた。最も重要なことは、どの地域の古墳群も「伝統」と「新要素」とが合わさる形で展開したことにある(註6)。「伝統」は時間的に変化しない縦のつながりだけでなく、横の関係である地域性としても顕在化している。特にそれが強く現れるのは埋葬施設などの内部構造においてである。松原古墳群の後期古墳においても、鳥取平野周辺古墳群との共通性をもちながらも、特に埋葬に関わる要素には湖山周辺地域の地域性あるいは「伝統」が色濃く反映されていると捉えられるだろう。

表20 周辺地域の横穴式石室一覧

古墳名	時期	墳丘		玄室		羨道		石室全長(m)	出土遺物	備考
		墳形	規模(m)	長さ(m)	幅(m)	長さ(m)	幅(m)			
松原28号墳	後期後葉(TK209)	円	12	3.1	1.7	3.1	1	6.2	鉄器・装身具・須恵器・土師器	盗掘されており、遺物の多くは流入土中より出土
葦岡長者古墳(吉岡1号墳)	後期後葉(TK43)	円	14	3.3	2.3	2.3	0.65	5.6	鉄器・須恵器	大正元年発掘。1982年再調査。明日の湖南を考える会1984
倉見9号墳	後期後葉(TK209)	円	10	2.3	1.3	1.8	0.85	4.1	鉄器・須恵器	墳丘上部は耕作時に削平されている。(財)鳥取県教育文化財団1996
熊田古墳	後期後葉(TK209)	—	—	3.2	1.2	1.3	0.8	4.5	鉄器・須恵器・土師器	工事中に発見されたため、墳丘規模や墳形、石室の規模については不明。鳥取教育委員会1980



図出典
1：牧本(1996)・2：鳥取県教育委員会(1980)・3：(財)鳥取県教育文化財団(1996)

第100図 周辺地域の横穴式石室

第4節 まとめ

調査の結果、松原古墳群では古墳10基、竪穴住居跡1棟、段状遺構3基、集石5基、土坑12基、埋設土器1ヶ所を検出した。遺構の時期は古墳時代と中世にはほぼ限定される。ここでは、これらの時期を中心に改めて内容を整理し、まとめに代えたい。

古墳時代前期～中期

本調査では、28号墳盛土下から古墳時代前期の段状遺構2基を検出した。いずれも石室掘り方によって半分が掘削されているが、残存部から方形プランと考えられる。段状遺構1では、周溝が見られるものの、段状遺構1・2とも柱穴や炉跡などは確認されていない。また、21号墳盛土下からも、古墳時代前期末～中期の段状遺構1基とそれに先行する時期の竪穴住居跡1棟を検出した。本遺跡に隣接する松原谷田遺跡では古墳時代前期の竪穴住居跡1棟、土坑9基が検出されており(鳥取市松原谷田遺跡発掘調査団編1975)、今後、松原古墳群を含めた集落の検討が必要となる。

古墳時代後期

本調査では、当初、松原古墳群の西端、湖山側に向かって西へ延びる尾根上の一支群を形成する松原20～25・27・28号墳の計8基の古墳を対象としたが、その後調査中に新たに検出した古墳を加え、計10基の調査を実施した。このうち主体部が調査地外となり、墳丘端部の調査に留まった20号墳、盛土・主体部が流出している29号墳は時期不明であるが、それ以外の8基は古墳時代後期に築造されたものとする。古墳群は、重複関係と副葬された土器などの検討から、後期前葉には、25号墳に続いて24号墳、23号墳に続いて22号墳が築かれ、後期中葉～後葉には27号墳に続いて21号墳が、後期後葉～終末期には28号墳が築かれる。つまり、まず尾根上に古墳群(22～25→27号墳)を構築した後、それらに割り込むように尾根から斜面へかけての新たな古墳(21→28号墳)を築いている。

古墳構築の特徴として、21・27号墳において古墳墳丘の増築に伴う「追葬」が確認されている。初葬は地山から墓壙を掘り込み、その上に墳丘を築く。追葬は初葬時に築いた墳丘上から墓壙を掘り込み、その上に墳丘を形成する過程が明らかとなっている。このような構築法は、鳥取平野において布勢5号墳や釣山2号墳で見出せるが、類例は少なく、横穴式石室採用への移行期の1つの特徴を示すものか今後さらに検討が必要であろう。28号墳は千代川左岸では数少ない、今回の調査地でも唯一の横穴式石室の調査事例となった。

湖山池南岸地域では、吉岡1号墳、倉見9号墳、熊田古墳など径10m前後の小規模古墳で横穴式石室が採用され、このうち墳丘規模・構築法、石室形態などから比較すると28号墳は特に倉見9号墳との共通点が多い。本調査地内では、28号墳をもって造墓活動が終了したものと考えられる。

中世以降

中世以降に帰属する遺構として、集石、土坑、埋設土器を挙げることができ、その多くがテラス部と28号墳周辺に位置する。湖山池周辺は、布勢鶴指奥墳墓群、桂見墳墓群など中世墓の調査が進んでいる地域であるが、本調査で検出したこれらの遺構は、中・近世墓に関係する。このうち集石4基は28号墳の石室石材を再利用して造られた中世墓と想定される。集石5は室町時代に遡る宝篋印塔が見られるが、主に中世後期から近世の石塔群を廃棄したものである。土坑1・3～6は、釘や木棺痕跡が見られないことから直接遺体を埋葬した土葬墓、墓壙底面の礫が被熱している土坑7は火葬墓(茶毘墓)、焼骨などを含む土坑2は、他所で茶毘に付した火葬骨を埋葬した火葬墓と考えられる。埋設

土器は内部に焼骨が見られることから蔵骨器であり、備前焼の型式から16世紀代と考える。

以上、主要な調査成果について概観してきた。今回の調査によって、松原古墳群の特色が断片ながら見えてきたが課題も多い。今後の調査によってさらに具体像の解明に繋がることを期待したい。

【註】

(1)本章で「松原古墳群」と略称する古墳群あるいは古墳群の支群には、今回調査した20～25・27～30号墳に加えて、調査地の東側に近接する松原26号墳も含まれる可能性が高い。一方、今回調査地東側の主丘陵頂部に展開する松原11～14号墳(第3図参照)などは、今回調査の一群とは異なった時期に築造された可能性がある。後述するように長期間継続する古墳群は丘陵内で時期的に立地が変遷する場合が一般的で、松原古墳群では今回調査の支尾根に後期古墳群がまとまっていることを考えると、主丘陵上のもののほうが古い時期に築かれた可能性がある。そのほか、調査地北側や南側の支尾根上の松原15～18号墳もそれぞれが群として連続的に築造されていると考えられる。また、これらとは異なった主丘陵上に展開する松原1～10号墳も、丘陵ごとに時期的なまとまりがあると考えられる。このように松原丘陵内には複数の古墳群あるいは古墳群支群が形成されている。したがって、古墳群の形成期間は長期にわたっており、かつ同時期にも複数の古墳群が形成されていた可能性が高い。松原古墳群の調査は継続して行われる予定であるため、今後、松原古墳群全体の形成過程が明らかになっていくものと思われる。

(2)円護寺古墳群では掘込墓壇b類が時期に関わらず多く含まれており、他の古墳群と様相が異なる。円護寺古墳群では箱式石棺を継続的に多用する点などが、その個別性を生じさせた原因の一つかもしれないが、同じく箱式石棺を多用する六部山古墳群は掘込墓壇a類中心で構成されるので、棺形態のみに要因があるわけではないだろう。棺形態も含めて、埋葬施設構築は古墳群ごと、地域ごとに個性が生じる余地があったようである。ただ、他の古墳群には掘込墓壇b類は見当たらないので、円護寺古墳群が例外的に独自の「伝統的」墓制を残したとも考えられる。

(3)ほぼ同時期の東伯耆西部では、鳥取平野周辺地域とは逆に、掘込墓壇c類からa類へと変化することが確認されている(野口2008)。墓壇類型は異なっているものの、同時期に似たような現象が起こっているのは興味深い。この変化は、この時期に堅穴系埋葬施設への追葬が行われ始めたため、埋葬施設の位置を追葬が容易な墳丘上部へと変化させた結果生じたものと解釈されている(野口2008)。追葬行為の普及は横穴式石室の導入に伴うものであろうから、鳥取平野周辺地域同様、横穴式石室の導入と関連して埋葬施設構築方法が変化していると捉えられるだろう。

(4)ただし、追葬自体は墳丘増築を伴う必要はないし、実際、後期中葉以前の後期古墳にもa類の複数埋葬例に追葬によるものが含まれている可能性は強い。ただ、そうしたなかに松原21号墳のように4基もの主体部が相次いで築かれた例はないので、やはり墳丘増築を伴う追葬例とは分けておく必要がある。墳丘増築があるとないのでは葬送の過程が大きく異なるであろうから、追葬の意味も全く異なってくる。後期中葉以降の例では、同じ古墳への追葬が積極的な意味をもって行われていたと考えられる。

(5)「古墳群」は丘陵上に展開するこうした複数の群を地形的なまとまりでもって一括して設定されているため、実際にはそれに含まれる古墳がすべて有機的に連続して築かれた古墳群であるとは限らない。したがって、本来は実体性のある単位としての古墳群、支群を抽出しなければ、詳細な古墳群の展開のあり方は明らかにしえないだろう。しかし、ここでは大まかな古墳群の形成の流れやおおよその形成パターンを確認するのに留めることとして、そうした「群」の再設定の手続きは踏まなかった。今後の課題としたい。

(6)こうした内部構造の「伝統」の強さについては、既に前期古墳についての指摘がある(君嶋2002・2005)。この指摘は、前期にとどまらず古墳時代全般に敷衍できるものと考えており、「伝統」と「新要素」の導入とが合わさりながら、鳥取平野の古墳文化が築き上げられたと評価できる。

【引用参考文献】

- 明日の湖南を考える会1984『葦岡長者古墳発掘調査調査報告書』
- 大谷晃二2003「古墳群とその時期」『宮山古墳群の研究』鳥根県古代文化センター調査研究報告16
- 小口英一郎・北島大輔・原あずさ2004「八橋8・9遺跡における6～7世紀の土器編年」『八橋8・9遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書87
- 近藤義郎編1991『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社
- 君嶋俊行2002「因幡・伯耆における前期古墳の様相」『山陰の前期古墳』第30回山陰考古学研究会事務局
- 君嶋俊行2005「因幡・伯耆における首長墓の消長」『前半期の首長墓の消長』中国四国前方後円墳研究会
- 下高瑞哉1996「因幡の横穴式石室」『山陰の横穴式石室－地域性と編年の再検討－』山陰考古学研究会
- (財)鳥取県教育文化財団編1983『円護寺遺跡群』鳥取県教育文化財団調査報告書13
- (財)鳥取県教育文化財団編1985『里仁古墳群』鳥取県教育文化財団報告書18
- (財)鳥取県教育文化財団編1996『西桂見遺跡・倉見古墳群』鳥取県教育文化財団調査報告書46
- (財)鳥取市教育福祉振興会編1994『六部山古墳群発掘調査書』
- (財)鳥取市教育福祉振興会編1995『六部山古墳群』Ⅱ
- (財)鳥取市教育福祉振興会編1996『面影山古墳群発掘調査報告書』
- (財)鳥取市教育福祉振興会編1998『布勢墳墓群』
- (財)鳥取市文化財団編2001『服部墳墓群』
- (財)鳥取市文化財団編2002a『円護寺古墳群』
- (財)鳥取市文化財団編2002b『下味野古墳群』Ⅰ
- (財)鳥取市文化財団編2002c『横枕古墳群』Ⅰ
- (財)鳥取市文化財団編2003『横枕古墳群』Ⅱ
- (財)鳥取市文化財団編2004『倭文所在城跡・倭文古墳群』
- (財)鳥取市文化財団編2007『横枕古墳群』Ⅲ
- 田辺昭三1981『須恵器大成』 角川書店
- 谷口恭子・前田均1991「第4章まとめ 第2節遺物について」『岩吉遺跡Ⅲ』鳥取市文化財報告書30
- 鳥取県埋蔵文化財センター編2008『古墳時代Ⅰ 古墳』鳥取県の考古学第4巻
- 鳥取県立博物館編2008『因幡・伯耆の王者たち』企画展図録
- 鳥取市遺跡調査団編1989『広岡古墳群発掘調査概要報告書 - 広岡76・77・78・79・80・81・82号墳の調査 - 』
- 鳥取市遺跡調査団編1992『釣山古墳群発掘調査概要』Ⅱ
- 鳥取市教育委員会編1980『ヒル山砦報告書』
- 鳥取市教育委員会編1994『六部山古墳群発掘調査概要報告書』
- 鳥取市松原谷田遺跡発掘調査団編1975『鳥取市松原谷田遺跡発掘調査概報』
- 中村浩1981『和泉陶器窯の研究』 柏書房
- 野口良也2008「梅田六ツ塚遺跡の総括」『南原千軒遺跡Ⅲ・梅田東前谷中峯遺跡・梅田六ツ塚遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書23
- 牧本哲雄1996「湖山池周辺の横穴式石室について」『西桂見遺跡・倉見古墳群』鳥取県教育文化財団調査報告書46
- 牧本哲雄1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ 園第6遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書61
- 和田晴吾1989「葬制の変遷」『古墳時代の王と民衆』古代史復元6 講談社

表21 松原古墳群調査一覧表

古墳名	時期 古墳時代	墳丘 長径(長辺) 短径(短辺) 比高差(東:西)	主体部			出土遺物		備考	
			名称	棺 形態 規模 長軸×短軸×高さ(m)	墓廬(石室) 平面・玄室プラン 規模 長軸×短軸×高さ(m)	主軸	棺・石室・墓廬		墳丘・周溝
20号墳	(後期)	円墳 10m 0.5m:1.6m						(周溝埋土) 土師器皿3 (流土) 須恵器甕片	古墳の約1/2 は調査区外 へ続く
21号墳 新段階	後期後葉 前半	楕円または方墳 21m 17m 1.5m:3.3m	第1主体部		隅丸長方形 40×20×0.4	E-25°-S	(墓廬) 須恵器坏蓋6、須恵器坏身9、須恵器高坏1、鉄 刀1、鉄鏃3	(墳丘検出面) 須恵器甕片 須恵器甕片	
			第2主体部		隅丸長方形 31×10×0.2	E-5°-S	(墓廬) 須恵器坏蓋1、須恵器坏身1	(周溝埋土) 須恵器坏蓋片 須恵器甕片	
21号墳 古段階	後期後葉 前半	楕円または方墳 21m 14m 1.0m:3.6m	第3主体		隅丸長方形 38×15×0.2	E-5°-S	(墓廬東側) 須恵器坏蓋4、須恵器坏身4、土師器甕2、管玉 1、ガラス小玉55、土製丸玉17 (墓廬西側) 鉄刀1、鉄鏃2、刀子1、須恵器坏蓋4、須恵器 坏身3、須恵器短頸壺1、須恵器蓋1	(周溝埋土) 須恵器坏蓋片 須恵器甕片	
			第4主体		隅丸長方形 40×16×0.5	S-23°-W			
22号墳	後期前葉	円墳 13.5m 12.5m 1.3m:1.7m	主体部		隅丸長方形 18×0.5×0.5	N-22°-E	(墓廬) 棒状鉄製品1、不明鉄製品2、須恵器 甕1、須恵 器甕1	(流土・周溝埋土) 須恵器甕片 須恵器 甕片 棒状鉄製品	盗掘有り
23号墳	(後期前葉)	円墳 12.5m 11.5m 1.3m:1.2m	主体部		隅丸長方形 21×14×0.2	E-7°-N			切り合い関 係から、22 号墳に先行 する
24号墳	(後期)	円墳 6.5m 0.5m:1.3m	主体部		方形 23×14×0.2	S-23°-E		(流土・周溝埋土) 土師器甕片	
25号墳	後期前葉	円墳 7.5m 0.5m:1.3m	主体部	木棺 1.45×0.85	方形 22×16×0.25	E-17°-N	(棺内) 土師器高坏1、土師器脚付碗6 (墓廬) 土師器甕1	(流土・周溝埋土) 土師器甕片 土師器高坏片	
27号墳 新段階	後期中葉	楕円または方墳 14m 12m 1.0m:1.4m	第1主体部		隅丸長方形 225×13×0.2	E-4°-S	(墓廬) 須恵器坏蓋2、須恵器坏身1、刀子1	(表土) 須恵器甕破片1 須恵器坏片1	
27号墳 古段階	後期中葉	楕円または方墳 13.8m 12m 0.5m:0.9m	第2主体部	組み合わせ式木棺 27×0.4×0.4	隅丸長方形 40×195×0.75	E-30°-S	(棺内) 須恵器坏蓋1、須恵器坏身1、土師器脚付碗1 (埋葬面) 土師器甕2、土師器脚付碗1 (裏込め土中) 鉄鏃1		
28号墳	後期後葉 後半	円墳 12m 残存高南:3.0m 残存高北:0.7m	横穴式石室		右片袖式 (玄室) 31×16×(1.5) (羨道) 3.1×1.0 (掘り方) 8.3×5.0×1.3	N-40°-W	(玄室部:流土) 須恵器坏蓋2、須恵器坏身2、土師器坏1、耳環 1、鉄剣片2 器種不明茎部片1他 (玄室部:裏込め土) 須恵器坏蓋1 (羨道部) 須恵器短頸壺1、須恵器高坏1、須恵器横瓶1他	(墳丘盛土) 須恵器坏蓋1 鉄釘片1 (周溝埋土) 須恵器坏蓋1	盗掘有り
29号墳	(後期後葉)	円墳 11m 9.5m 0.5m:2m							盛土・主体 部流失
30号墳	(後期)	円墳 4.5m 3.5m 0.2m:0.9m	主体部		方形 (1.1×1.1×0.2)	S-25°-E		(周溝埋土) 土師器高坏片1 (流土) 須恵器器台脚部片 1	

・時期で()をつけているものは推定時期を示す。
 ・規模などの欄で()をつけているものは残存値を示す。
 ・比高差は墳頂部と墳端の標高差を示す。